
今宵の月は綺麗だ

草民

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今宵の月は綺麗だ

【Nコード】

N9781Y

【作者名】

草民

【あらすじ】

烏哭三蔵に、玄奘三蔵と孫悟空みたいな関係の子が居たとしたら。そんな妄想。

(前書き)

烏哭の章

ダツチな妻のカナちゃんを片手に屋上に登る。
白衣に身を包んだ、少女のような容姿の少年。

そんな凡愚には理解できない行動を取る男の娘が、この物語の主人公である。

「カナちゃん片手に、この世等とは憂いちゃう俺マジクール」

そして何やら不器用な、普段笑う事を忘れているような。

そんな笑顔を浮かべながら、うさ耳の少女のような人形？と屋上で踊りだす少年。

だがしかし、無駄に洗練されているその動きは、才能の無駄遣いといしか言いようが無い。

相手が人間ならばさぞ驚くだろう。何故このような奇行じみた事をしているのか。

普段笑わない彼が、笑顔を浮かべている。彼を知っている人物であれば尚の事。

「人間なんて所詮分かり合えないものさー。つまんないよねーカナちゃん？」

「…」

「そうかそうか！流石カナちゃん！俺と長年トウギャザーしてただけの事はある！」

「……」

「あの腐れ爺どもは、なんで俺の崇高な考えが理解できないのか。何故俺が準教授のままなのか……恐らく俺の溢れる才能と若さにSHITしてるからに違いはない！」

「……」

人形に話しかけながら笑う少年は、本当に楽しそうに踊る。少年が踊るこの屋上は、とある大学の研究塔の上である。

しかし立ち入りは禁止されていて、危ない場所だったりする。空の月は雲に覆われて、少年の心の雨が降り止まない。

「もう果たす事ができない約束か……いかな、昔を思い出しちゃうよ……いつこの雨は上がるんだろうな？ずっと降りっぱなしだぜ」
「……」

そう言いながら、屋上の手すりに手をかける少年。

「死人には勝てねえや……同じ土俵に上がれば勝てるかなあ」
「……」

少年は雨が降っていると認識しているが、”雨？なぞ降っていない。そもそも少女のように見える人形も、彼がそう見えていると思い込んでいるだけで。

本当はただのウサギのぬいぐるみだ。
だが、彼の中ではそれが真実だったのだ。

「失って気づくなんてな……天才が呆れちゃうよなほんと……
うん。決めた。カナちゃんとはここでお別れだ。今までありがとう。
お前は元気に暮らせよ？」
「……！」

そう言い、少年は抱きしめていたぬいぐるみを地面に座らせ、空へ
駆ける。
もちろん少年は空を飛ぶ力等持ち合わせてはいない。そのまま落下
していくだけだ。

「今宵の月は綺麗なんだろうな……」

見え隠れする月を見ながら彼は独りごちる。
落下していく中で少年は、置いていったぬいぐるみの目から、涙が
流れているような幻想を見た。

お空からアイキャンフライしたら、変なところにいつの間にか居た。何を言っているのかわからないと思うが。俺にも理解できない。

池があるのでとりあえず、ふつくしい自分でも堪能しようと思った。いつも通りのだぼだぼの白衣に、灰色っぽい髪……あれ？純白になつてない？

とうとう俺は天使化してしまったのか。その内デリスなカーラインからお迎えが来そうだ。

そんな風に考え込んでいると、変なおっさんに絡まれたのさ。

爪長いし、歯もなんか犬歯？だけ長い。

何者なのかと聞けば妖怪だとのたまうのさ。

俺はとうとう妖怪のおっさんが跋扈する、幻想に迷い込んでしまったのかとげんによりした気分になる。

天国に行くと思ったら、マヨヒガは良いところ。一度はおいでおいでな展開になっていた。

いかんせん戦闘技術なんて持ち合わせていなかったのさ、か弱い俺は逃げ惑うしかなかったのさ。

まあ昔から逃げる事に関しては天才的だったので、そそくさと逃げおおせたんだが。

だがいかんせん、研究尽くしの日々だったので身体が鈍っていたのだろっか？俺はすぐへたってしまう。

このままだと、追いつかれてしまうかもしれない。

どつか隠れられるところ。誰か人が居るところ。誰か盾にしてやるよ！！

そんな感じで走っていた俺は、建物を発見する。あそこにするか。

そんな風に逃げ込んだんだよ。だがその逃げた先がいかんかった。寺か神社か知らんが。よくわからんところに逃げ込んでたんだ。

すると、なんか頭頂部だけ光ってるあや　いおっさんが目の前に居た。

「ここも妖怪のすくつかよ！！」と俺は思わず叫んでしまった。

だがこのおっさんは少し優しい表情で、「もう安心していいぞ小娘」なんてのたまいながら俺に微笑みかけるのさ。

そして俺を追っかけていた妖怪のおっさんとか対面！

とうとう俺は二人に食われてしまうのかと思ったが、そんな展開は無かった。

何かすげえ轟音が鳴ったかと思ったら、俺を追いかけてきた妖怪が粉々に吹き飛んだ。
ぐろいです。

次は俺の番か……襲われるのは嫌なので、俺はちゃんと男だと説明したら触ってきやがった。

ナニに？知らん、忘れた。「変態死ね！！」と殴ったら笑ってやがった。

そう、これが剛内三蔵との出会いだった。

それから、俺は何故か剛内に引き連れられて寺で住む事になってしまったのである。

俺が幼女に見えるからと言ってまさかこいつは……と思ったが。そういうのは無かった。

そうか俺は寺で二トになれるのか、と思ったが。そうはイカンザギイ！

何故かスキンヘッドのガキどもに混ざって経典読んだり、境内お掃除したり、組み手？なんかをする羽目になる。

剛内三蔵がたまに俺にだけ個別授業だとも言わんばかりに、俺をしごくのは酷いじめだった。

そしていつの間やら俺主席になっていて、次の日また人を倒す羽目になる。

大半の寺のガキどもは、何か不真面目なのに何でこいつがどうのこうのなんて、そんな感じた。

中には俺の容姿が気に入ったのかハアハア言いながらみっちゃん萌え！とか毒されている奴も居るが。

そうか、自己紹介をするときにみことのみっちゃんなのです！よろしく！腐れ野郎どもと言ったのが駄目だったのかな。

特に理由は無い。苗字まで言わんで良いだろうと思ったし、適当で

いいだろうと思ったからだ。

主席だから目立つのかなと思い、そう思った日から手を抜き始める。

剛内三蔵にも、もう遅れを取る事は無くなったし、覚えるモノはすべて覚えたと思う。

最初は楽しかったが、慣れというものは怖いもので。

俺は映るもの全てがまた、つまらないモノに成り下がってしまった。だが、別にしたい事があるわけでもない。

このよくわからない世界でも生きていけるだろうと思う知識も力も手に入れた。

後はただら二トちゃんをするしかないね。そんな感じで月日が流れていったのである。

剛内三蔵は、何か思っていた人間とは違うとも言わんばかりに落胆してた気がする。

勝手に人に期待して、勝手に落胆する。

この世界が自分の居た世界と同じなのか違うのかわからないが、人間はどこでもやはり同じなのだなど、俺は思った。

そんな怠惰な日常を過ごし始め、数年経ったある日、俺は運命に出会う。

ナニやらおちゃらけてる奴。それが第一印象だった。名を健邑という。何やら影がある奴だったが、寺のアホどもは気づかない。

座学、組み手もトップクラス、奴はたちまち主席に登りつめる。

人当たりも良く、たちまちあいつは寺の中心的存在になる。

俺にキヤーキヤー言っていたアホどもも、あいつに懐く。

まあ別に面白くもなんとも無い奴等だったのでどうでも良いと感じた。

この寺に來た頃の俺みたいな奴だなあとそう思った。

だが日々を過ごしていく内に、コイツはただの天才ちゃんではなかったと知る。

「あんたも飽いてるんだろ？」そうある日、一人でぼーっとしていた俺に奴が話しかける。

すぐく、似ている。俺に、まるで合わせ鏡のように。そう奴はのたまう。

俺も目を見ればわかった。こいつは現状に満足していない。

今が楽しくない、面白くない。不満だけが募るだけ。そして自らを偽る。何かを楽しむために。

そんな日々を過ごしていると、目が語りかける。

まあ俺とはまた違うタイプだけどな。そう感じながら、一度じっくり話してみるかと話し合う。

その日、色々語り合い。意気投合し、俺はけんゆう。後のけんちゃんとう無二の同胞となる。

アレから一緒になって、エロいお経を創作したり。
一緒に寺の壁にえっちでむふふな絵を描いたり馬鹿な事ばかりして
いた。

ある日、けんゆうが、俺がいつも持ち歩いてるうささんを欲しがる
ような目で見ているのに気がつく。

俺は趣味で作っている、ウサギのぬいぐるみを一つ分けてやったら
「みっちゃんありがとう！」とすごく喜んだ。

何だ、お前もうささん好きなのか。中々わかる奴じゃないかと再認
識。

そして、こうした馬鹿な日々が続いていき、主席はけんゆう。次席
が手を抜いている俺。

この寺はアホしかないのか。仕方ないからもつと楽しい寺にして
やろうか？

しかし、やるせない気分にならなないので、再びぬいぐるみを作
る俺がジャステイス。

そんな感じで日々が過ぎていったある日の事である。

寺に光明三蔵がやって来た。

こいつを見た瞬間俺は、ここがどういう世界なのかを理解し、ここ

に来る前の記憶を思い出す。

ああ、なんだ。二次元に俺は来たのかと。

おっさんだらけの幻想　じゃねえ！！イケメンだらけの桃源郷だった！！

なんだ、昔見たことあるような気がしていたが、知ってる事だったのか。

俺の退屈でつまらないという感情が加速する。

まるでアイドルにキヤーキヤー言うミーハーな女どものように。
浮ついている寺の腐れ野郎どもに呆れる俺とけんゆう。

「く　くだらないねエ（なア）」

二人顔を見合わせて、はあ……とため息をついてしまったのは仕方の無い事だと思う。

そして次の日。

俺はじゃんけんで勝ったので、掃除せずに寝っ転がって生足ぶーらぶら。

けんゆうは仕方ないねって感じて境内をお掃除しています。

そんな俺たちの所に例のアイドル。光明三蔵法師がやってきた。
俺はめんどくさいのが嫌いなので、うささんを抱きしめて寝たふりをする。

みつちゃんもコレの相手しろよ。そう言わんばかりの視線をけんゆーは俺に送るが知らん顔。

仕方なく光明三蔵の相手をしだすけんゆーちゃんマジ天使。

「なんでしょーかね？」

「ああ、いえね。ウチの江流も大きくなったらこんなカンジかなって」

「…こつりゅう？」

「私の息子みたいなものです。4・5年経てばそこで寝たふりをしている、可愛い子くらいになるんじゃないでしょうか。後、ちょっと貴方に似てるトコありましてね」

「俺に？顔がですか？」

「いえ、顔は全然」

俺がうささん抱きしめて、狸寝入りしていたのはばれていたようだ。流石三蔵を名乗るだけあって、大した奴だ！！

助けてくれ！みたいな視線を俺によこすけんゆー。

まあどうでもいいからけんゆーに任せとこう。けんゆーは犠牲になったのだ……

「……へえ。今いくつですか」
「今三十九ですが」

「いやアンタじゃなくて」
「ああ江流がですか。今年で四歳です」
「あ、そーっすか」

これがまた可愛いんですよとか、夜寝る時は私が一緒じゃないと寝られないとか。
まだおねしよするんですよ？可愛いでしょう？とか親バカの子供自慢がはじまりました。
これにはけんゆーも苦笑い。

「ところで健邑君。貴方は何故この修行寺に入ったのですか」

ああ、そういえば何でここに来たんだろうねけんゆー。
いつもアホな話しかないから、そんな話した事なかったわ。
俺は耳をすませて、二人の会話を聞き続ける。

「……何で？」
「イメージに合わないなあと思って。貴方達、こーゆー体育会系は苦手なタイプじゃありません？」

「『三蔵法師』になるためですよ。それが、一番難しい事だつて聞いたから」
「ほお……」

「あーあーきこえない…… z z z」

俺は寝ているんだ。寝ている事にしろ。話をふるんじゃない。

「……大概の事は手をだしてみましたけど。実際どれも簡単で、つまらない事ばかりだったから。退屈しないものが欲しかったんですよね。……そこで寝たふりをする」馬鹿？と一緒にです」

俺の事をさりげなく馬鹿にしゃがったので、小さい小型のうささんを投げつけてやった。

これにはけんゆーも大喜び。だと思う。

まあなんだ、めんどくさいのを押し付けて、ちよつとは悪いと思ってる。

「……はあ成る程。何をやってもつまらないとなると、貴方達はよっぽどつまらない人間なんですねぇ」

この言葉に俺たちは敏感に反応してしまう。

びくつとする俺と、目を細めて光明を睨むけんゆー。

落ち着け馬鹿。相手のペースに乗せられるんじゃない。

「さて、お芋さんでも、貰ってきましょかね」
「……は？」

「は？つてこんなに枯葉を集めたら、お芋焼かないで一体何を焼くんです？」

「……これから毎日寺を焼こうぜ？」

「みっちゃんそれ違う。乗せられんなよ」

これが三人の知り合った瞬間であった。

それから数日経ったある日の出来事である。
剛内三蔵が吐血して倒れたのである。

ああ、おっさんとうとうお迎えが来ちゃったんだね。
世話にはなったけど情なんて芽生えなかった。
まあ俺は俺が作ったうささんにしか情なんて芽生えない。仕方ないね。

そしてその夜、剛内の内弟子？60だか70だか居る奴等が本堂に集められる。

けんゆうと行く道中、うささんごっこをしながら追いかけてくをしたら剛内に怒られた。

どうやら無天経文の後継者を決めたいらしい。
けんゆうがそわそわしてた。まったくわかりやすいやつだねえ。

俺はすごく興味が無かったです。昔こっそり全部暗記したし。
あんな古臭い書物に用はない。

そして継承者？を決める選抜者の名前が呼び上げられる。
そこに俺とけんゆうの名前が出る事は無かった。

けんゆうはごうだいに食って掛かる。

どのような人選で、如何な条件によるものなのかと。

ごうだいは、聞く耳もちませーんみたいなカンジで、それがわからない以上、お前が選ばれる事は無いと言ってた。

これに怒っちゃったのか、けんゆうとごうだいの喧嘩が勃発。

けんゆうは華麗な身体捌きですぐ、ごうだいを組み伏せる。

流石けんゆうだと褒めてやりたいところだ！

俺は「ええぞ！ええぞ！」って感じで見守るだけだったけど。

光明は「楽しいですか？それ」みたいな感じでけんゆうの手握って止めてた。

折角面白い事が起きそうだったのに。もう、焦らすのが好きなんだから光明は。

そして、そんなこんなで懲罰牢に入れられちゃった、けんゆうに差し入れを持っていく最中だったりする。

「よっ！残念だったな途中で止められて」

「……みっちゃんか、あいつ滅茶苦茶強いよ。手にまだ握られた跡が残ってる」

「まじかよ。あんな人畜無害みたいな顔してそうとうのやり手だったとは……ケツ狙われてるかもよけんゆう」

「やめてくれよ。縁起でもない」
「違うない」

ちよつと落ち込んでるかなって思って、俺はちよつとした和むトクをする。
まあそこまで深刻に落ち込んでるって訳でもなかったね。良かったね。

「なあ……あいつなら俺たちの” 渴き？を潤してくれるんじゃないか？」

「……はあ？何々？おまえまだ人間に” 期待？なんてしてたの？おつどろいたア！若いていいねえ！俺にはそんな発想に至る事すら無かった。新しい発見だよコレは！！」

「……」

何なの？何感化されはじめてるのけんゆう？

お前は俺と同じような奴なんだろ。感化されてんなや。

俺がフヒヒと笑うと、けんゆうは黙っちゃった。

まあ落ち込んで無かったし、別に長居する必要性は無いなと思い。
差し入れのうささんタイプのヤツハーシ（みっちゃん作）を渡し、俺はその場を後にする。

部屋に帰る途中で光明に出会ったが、「仲がよろしいんですね」なんてほざきやがった。

俺とあいつはそんな仲良しこよしの関係じゃねーよ。

気が合う、波長が合う。話が合う、一緒に居て楽しい。だから居るだけ。

利害が一致してるから、だから一緒にただ居るだけだ。

「……そうですか」なんて妙ににやにやした表情で行った光明に、今度うささん爆弾でも投げてやろうと思いました。

そして後継者選定の戦いがはじまる。

俺がぶらぶらと生足をバタつかせて、うささんと戯れていると。

光明が一緒に見に行きませんか？なんてほざくんですよ。

まあ暇だったし？面白い奴だったから、俺はついていくことにした。

そして戦いもそろそろ最終決定戦！みたいな感じ。

相手は剛内三蔵。寺の腐れ野郎どもはとまどってる。

馬鹿じゃねえの？さっさとやれよ。戦いなんだろう？油断したら死ぬぜ？

そして、いつのまにか現れていたけんゆうーにばっさばっさ されていく腐れ野郎ども。

ほらね？言わんこっちゃない。

真打ち登場みたいな感じで、けんゆうー大暴れな快進撃。イカすじゃない。

一緒に妄想するだけで、マントラ無しで術を行使できるようにした特訓が役に立ったな。

俺も一緒に暴れようかなって思ったんだけど、光明に止められました。

こいつマジどんな握力してやがんだよ。
いてえワロタ。

「やはりこうなるか……」

そう、剛内が呟いたのが合図とでもいうように二人は動き出す。
そして熱いバトルになるかなって思ったんだけど。

剛内すぐ倒されちゃったね。よえー。

まあ本気の俺より弱かったし、仕方ないね。

そして一羽の鴉が啼いたような気がした。
返り血で真っ赤なような、真っ黒なようなけんゆー。
そんなけんゆーに光明は話しかける。

「……また、逝き損ないましたか？」

まあ、剛内も病気で死ぬ前に決着付けたかったんだろうな。

ごうだいもう動けん。これでいいんじゃないの、うん。

けんゆーは黙ったまま、やるせない表情で俺たちを見るだけだった。

その後、光明が”烏哭？”と名付けた最年少の三蔵法師の額には。
選ばれしモノの証　印チャクラが現れる事は終ぞ無かった。

「……月が隠れたと思ったら貴方達のせいでしたか」

「会って第一声が酷い言いがかりの若作りに、俺は悲しみが鬼にな
った。なぐさめて！けんちゃん！」

「酷い言いがかりだよなア？みつちゃん」

俺が昔を懐古しながら、若作り野郎に折角会いに来てやったというのにね。

こいつは、俺たちのせいで月が隠れたという。

酷いよね！けんちゃんに頭をなでなでされる俺がジャスティスなのさ。

「貴方も若作りじゃありませんか……ホラ、鈴虫すら鳴き止んじゃいましたよ」

「あ ハイハイ。そりやすみませんでしたね」

「貴方達は相変わらず、仲がよろしい事で」

「ねね、さっきのが噂の空から降ってきて、桃を割ると出てきた太郎？」

「いやいやみっちゃん、クマに斧をブンブン振り回してた所を、光明が止めて連れてきた。筋太郎じゃなかったっけ？」

「どれも合ってます。江流です。もうじき七歳になります。可愛いんですよコレがまた。しかし、いまだに貴方達の思考回路が理解できませんよほんと」

折角殺伐とした雰囲気（ふいんきで何故か変換できた）を変えてやろうと俺たちがボケてやったのに。

光明は普通に返すという愚行を俺たちに喰らわせた。なんて奴だ……

俺はやるせなくなつてタバコを飲み始める。

拗ねないでくださいよと光明は言うが、俺は拗ねてなんて無いもん。

「生意気そうでいいよね」

「もう本当に、数年前の誰かさん達を見ているようですよ」

「「へー。誰の事だろーね（な）」」

「やれやれ」

子供扱いしやがる光明に俺たちはすかさず知らんぷりする。

鈴虫君達も「この若作りは妄想狂でいかん」とでも言うように再び鳴き始める。

柿ピーないの？ベースターどこー？と俺たちが言うのと。

高いですよと光明は言う。

金取るのかよ！！SHIT！！

「ああ　そういえばアレですねエ。お久しぶりですお二人とも」

えっ、今更？今更なの？俺とけんちゃんは呆然としてしまった。

さっき俺たちの事を訳がわからないって感じで光明は言っていたが。

お前のほうが訳がわからなくて面白いよ本当に。

俺たちは思わず苦笑い。

「ククク…アンタ本つつ当に変わんないなア光明」

「フヒヒ…俺もあんたみたいになりたいもんだよ光明」

「……それって。一応褒められてるんでしょうかね？」
「うーん。内緒」

相変わらず三人集えばなんとやら。

でも楽しい、多分ふたりもそう思っているはず。

見上げてみると、さっきまで隠れていた月が出ていた。
心の雨は相変わらず降ったままだ。今も昔も変わらない。
けど、こいつらと居ると少しは、ましな気分になる。

今宵の月は綺麗だなア

（後書き）

「まだ降りてないよね、ボクたちもアンタも」

だってホラ 貴方は 今もまだ、そこに居るから。

全ては月とウサギだけが看ていた物語

補足説明的な何か

冒頭のぬいぐるみ 死んだ恋人からの贈り物 みっちゃんのお宝物だった

みっちゃん キてる男の娘 趣味はぬいぐるみ作り

けんちゃん 原作より明るい烏哭な三蔵 みっちゃんが作ったうささんがお気に入り

光明 若作りの実は三蔵な奴

あとがき

虚構の歪な合わせ鏡。二人の嘔吐が交差する時、物語はk s k
…しない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9781y/>

今宵の月は綺麗だ

2011年11月29日19時51分発行